

インタビュー

ヘゲデューシュ・アンドラーシュとの会見

小山 洋司

ヘゲデューシュ・アンドラーシュ(Hegedös Andras; アジア系であるハンガリー人の場合、日本人と同様、苗字が先に来る。)は、ハンガリー事件(1956年)当時の首相であり、その後、社会学者になり、日本では『社会主義と官僚制』という著作で知られている。彼は、昨年(1999年)11月に亡くなった。私は1998年7月にヘゲデューシュと面会する機会を得た。興味深い話が聴けたので、そのときの記録を活字にしておきたい。彼とのインタビューを紹介する前に、ハンガリー事件について簡単に説明しておきたい。ハンガリー事件は次のような経過をたどった。

1956年2月のソ連共産党第20回大会でのフルシチョフ第一書記による「スターリン批判は東欧諸国にも大きなインパクトを与えた。国民の間から、スターリン粛清の犠牲者の名誉回復と粛清を組織した人物の追放を求める声が上がった。政治的変化はポーランドとハンガリーにおいて最も劇的な形をとった。…[中略]…10月6日、完全に名誉回復したライク前外相らを追悼する国民葬が行われ、30万人を越える人々がブダペストの街々を行進したが、当局が恐れるような事件は起きなかった。10月19日にポーランドでゴムウカが復活(第一書記就任)したことに刺激され、ハンガリーでもナジの復権を求める学生の運動が発展した。10月22日夜のブダペスト工業大学での集会で約5000人の参加者は翌朝までの討論で、ソ連軍の撤退、ナジを含む新政府など、16項目の民主化要求をまとめた。この集会の呼びかけにより、10月23日午後、ポーランド連帯デモが開始された。これに対して、ゲレ(第一書記)はラジオ演説でソ連を擁護、デモを「排外主義」「挑発」等と非難して、国民の不満に油を注いだため、デモは民衆反乱へと広がった。国会前広場に集まった民衆に対して秘密警察が発砲した。軍隊は民衆を攻撃することなく、なかには民衆に武器を渡すものさえあった。10月23日の真夜中、ゲレとヘゲデューシュ(首相)はモスクワと連絡を取り、首都郊外に駐留していたソ連タンク部隊の出動を要請した(第1次介入)。10月24日、ゲレは第一書記を辞任し、カーダール・ヤーノシュがそのあとを継いだ。10月13日に復党が認められたばかりのナジ・イムレはこの時点で首相に就任した。ナジは民衆の要求に押されて、複数政党制への復帰とワルシャワ条約機

構からの脱退を声明した。11月4日、ソ連軍は第2次介入を行った。ソ連軍と共にハンガリーに戻ったカーダールが「労働者・農民革命政府」の樹立を宣言し、事態の收拾をはかった。ナジとその友人・家族はユーゴ大使館に非難した。カーダールは、ユーゴ政府にナジを逮捕しないという誓約書を提出したが、ナジらが大使館を出た途端にソ連軍によって逮捕され、ルーマニアに連行された（その後、秘密裏にハンガリーに戻され、裁判を受け、58年6月に処刑された）」（拙編著『東欧経済』世界思想社、1999年、28-29頁、一部修正）。

この間のハンガリー指導部の対応は非常に拙劣であった。フランソワ・フェイトは次のように述べている。「彼らがいかに国民生活の現実との接触を欠いていたか、ゲレとその主要な協力者たちが9月終わりから10月初めにかけてソ連に長々と滞在していた事実ほどこれを証明するものはない。かつてコミンテルンの高級官僚であったゲレはハンガリアの問題を解決する鍵はソ連のなかにあると信じつづけてやまなかったのである」（F. フェイト『スターリン以後の東欧』岩波現代選書、1978年、126頁）。

10月14日には、ゲレはカーダールやヘゲデューシュらを伴ってベオグラードを訪問した。ユーゴでは党ならびに政府レベルの会談がもたれた。国内情勢が不安定であったにもかかわらず、ハンガリー指導部はしばらく国を留守にしたわけだが、当時、駐ソ・ユーゴ大使であったミチューノヴィチは、彼らの狙いを、ユーゴとの関係正常化を宣言したかったこと、そしてユーゴを通じて国内における自分たちの政治的地位を改善できるものと思っている、と見ていた（ヴェリコ・ミチューノヴィチ『モスクワ日記1956～1958』恒文社、1980年、115頁）。ゲレは、「この旅行からなにひとつ政治的教訓もひきださず23日に帰国した」（同上書、127頁）。そして、10月23日の出来事を迎えたのである。

『社会主義と官僚制』の訳者である平泉公雄氏の「訳者あとがき」によれば、「ヘゲデューシュは、1922年、ハンガリー西部の一農村で農民の家庭に生まれた。1941年にブダペシュト工科大学に入学、ここで非合法の共産主義青年運動に参加した。1944年にはその活動のために2年間の禁固刑に処せられたが、ここから脱走し、その後も活動を続けた。第2次大戦後全国で実施された土地改革にあたっては、2つの州でこれを指導した。その後1947年まで共産主義青年運動の指導部にあり、ついでハンガリー勤労者党（共産党）中央委員として農業部の活動にたずさわった。1951年に入閣したあとは、1953年から第一副首相を、1955年から1956年のハンガリー事件の勃発までは首相をつとめた。…ハンガリー事件ののち、彼は政治から身を引き、学問の世界に転じた。……1968年のワルシャワ条約機構軍（これにはハンガリー軍も参加していた）に夜チェコ侵入は、ヘゲデューシュの人生に新たな転換をもたらした。チェコ侵入に抗議し、彼は、自己の見解をこめた手紙をハンガリー社会主義労働者党中央委員会に送ったのである。こののち彼は、社会学研究所所長の職を追われ、科学アカデミー付属工業経済研究グループの主任研究

員のポストに移された。そして1973年には、『逸脱した』その社会学的諸論文、とくに官僚制に関する批判的諸論文のゆえに党から除名され、同時に研究上の職をもうばわれた」（『社会主義と官僚制』大月書店、1980年、288 - 289頁）。1975年にはまだ52歳の若さで年金生活に入ったという。

革命家・政治家として、首相までつとめたのち、一転して学問の世界に入り、研究を深めるにつれて、体制に対して批判的になり、ついには「異論派」として批判されるようになり、党から除名されたというヘゲデューシュの数奇な運命に、私は以前から関心をもっていた。私は、1996年に刊行した拙書『ユーゴ自主管理社会主義の研究』（多賀出版）の終章で次のように書いたことがある。「現代社会においては自主管理は特定の個別企業においては可能である。しかし、・・・・ユーゴが国全体を自主管理的原理で動かし続けることは困難であるように思われる。かつて、ハンガリーのヘゲデューシュは、社会は経済発展と経済効率を断念しない限り、権力的決定権限を保持する専門的統治集団を必ず必要とするのであり、民主主義的発展の主要な道は彼らに対する勤労者の側からの効果的で自主的な社会的統制であると説いたが、彼の議論は傾注に値する」（346頁）。

晩年のヘゲデューシュにインタビューできたのは、次のような事情による。私は文部省在外研究員として、1998年3月10日から7月末まで5ヵ月近く、ロシアおよび東欧諸国を訪問する機会を得た。6月28日から7月4日まで1週間、ハンガリーを訪問した。6月29日（月）に科学アカデミー世界経済研究所を訪問した。所長のエヴァ・エールリッヒ博士とは昼食をとりながら、いろいろ議論したが、そのなかで、話がヘゲデューシュに及んだ。彼女は、私に、「ヘゲデューシュは自分の家に近くに住んでいる。もし彼に関心があるならば、会談をアレンジしてあげる」と言ったので、ぜひお願いしたいと述べたところ、翌々日（7月1日）の朝、ホテルの部屋にいと、エールリッヒから電話があり、「ヘゲデューシュと連絡がついた。会ってくれることになった。日時と場所は直接本人と電話で話して決めてくれ」と言い、ヘゲデューシュの電話番号を教えてくれた。私は、早速、彼に電話した。彼は英語で応対し、12時に自宅に来るようにと言った。私はこの日、彼の家に行き、呼び鈴を鳴らすと、夫人が出てきて、裏庭に回るように言った。私が訪問したとき、彼は裏庭に置いた丸いテーブルを前にして椅子に座り、彼はジョージ・オーウェルの英文の書物を読んでいた。私を見ると、彼は立ち上がり、握手をしたが、その動作からは、だいぶ足腰が弱っているように見うけられた。彼には6人の子供と17人の孫がいるが、そのうち3人の孫はオーストラリアに、5人の孫はイギリスに、そして9人の孫はハンガリーにいるとのことである。ちょうど夏休みで、オーストラリアにいる孫とロンドンにいる孫が遊びに来ていると彼は言っていた。彼と話しができたのは12時から14時30分までの約2時間半であるが、正味はその半分である。彼は英語で長時間話すのはしんどいと言い、オーストラリアでテレビの仕事をしている孫（男性）を呼んで通訳させた。

後半は、別の孫（男性）が通訳してくれた。私はまず自己紹介し、東欧、とくに旧ユーゴの自主管理を研究してきたこと、ヘゲデューシュの著書『社会主義と官僚制』に興味をもち、自分の著書にも引用したと述べた。ヘゲデューシュの話はあちこちに飛んだが、私のメモに基づき、整理すると、次のようになる。彼の話は非常に興味深いものであるが、とくに印象に残ったのは、「ハンガリーは社会主義国になったことはない」という彼の意見である。

なお、小見出しは、私が適当につけたものである。文中の[]は、私の補足説明である。

経歴

1922年10月31日生まれで、農家の出身である。戦間期のハンガリー社会は半ば封建的であった。市場的關係は存在しなかったか、存在したとしても非常に弱かった。若干の民主主義が存在したが、明確なものではなかった。多くの貧農が存在した。ドイツとの強い結びつきがあった。第2次世界大戦で約100万人が殺されたが、その半分はユダヤ人で、残りが兵士であった。1400万人のハンガリー人のうち400万人が国外に取り残されたままである。

大土地所有者を憎んだ。それが、共産主義者になった理由である。自分には農民的なバックグラウンドがある。農民学校で学んだのち、大学に進み、そして非合法化されていた党に加わった。大学では社会学を学んだが、忘れた。44年に大学の共産主義者グループのリーダーになった。ヒエラルヒーはなかった。戦争に反対し、逮捕された。政治犯となった。処刑のためドイツへ送られる途中、ブダペストから10キロメートルの地点で列車が停車し、再び動き出す前に飛び降り、逃亡した。ブダペストに戻り、ソ連軍が来るまで潜伏した。45年3月15日、赤軍がやって来た。自分は22歳のときに政府および議会のメンバーになったが、自分が最年少であった。この人事は、ソ連による内部的な決定によるものだ。友人の社会学者であるエルデイ・フェレンツ (Erdej Ferenc) は内務省に入り、私を党の仕事の方に向けた。戦後、農務省に入り、1951年、29歳のとき農地改革担当の国務大臣になった。

自分自身は左翼である。年齢は離れているが、オルバン[「青年民主連合」(FIDES)の党首で、この年5月の総選挙で勝利し、7月に首相に就任した]は友人である。80年代、オルバンは警察からつけ狙われていた。最近オーストリアの新聞が、オルバンを最も若くして首相に就任すると報道していたが、それは正しくない。自分は34歳で首相の地位を失ったが、オルバンは35歳で首相に就任するのだ。

ハンガリーとユーゴスラヴィア

1953年にスターリンが死んだ。ソ連と同様、ハンガリーでも変化が生じた。1956年10月、首相としてユーゴを訪問した。10月23日朝戻った。ユーゴではヴクマノヴィチ＝テンポが応対した。

彼ら(ユーゴ人)は、地域間格差という問題を解決できなかった。たとえば、スロヴェニアとモンテネグロとの間には4倍の経済的格差が存在した。自分は1960年に社会学研究所の所長に就任した。旧ユーゴのスプリットでの国際会議に参加したことがある。その途中、ザグレブへバスで行った。スロヴェニアとクロアチアのエコノミストと会い、話をした。1962、63年であったが、すでに彼らは独立について語っていた。強い断絶感 (strong feeling of break) が存在するのを感じた。旧ユーゴにはハンガリー系の少数民族が50万人住んでいた。

[戦時中、] ヴォイヴォディナにいた友人とコンタクトをとった。多くの恐ろしいことが起こった。ハンガリー首相のパル・テレキ (Pal Teleki) はユーゴスラヴィアと友好条約を締結した。2年後、彼は、ドイツの圧力により、ドイツがハンガリー経由でユーゴを攻撃することを余儀なくされた。彼は自殺を図った。ハンガリーの民族主義者はヴォイヴォディナへ行き、セルビア人を虐殺した。41年に、スポティツァをハンガリーに取り戻した。45年に第2次世界大戦が終わると、セルビアのパルティザンがやってきた。セルビアのパルチザンは報復に多くのハンガリー人を殺した。セルビア人1人の死に対して、10人の人々が処刑された。いまでもコンフリクトがある。[ヴォイヴォディナに住む] ハンガリー人は、コソボのアルバニア人ほどではないが、強く自治を望んでいる。

自主管理

自分は1971年に、『社会主義と官僚制』を刊行した。「偏見と幻想なしに」論じると書いたところ、検閲により、「幻想」という言葉は削除された。この書物のなかで、ユーゴの自主管理についても書いた。ユーゴの労働者たちは満足していない。彼らは働く環境に不満をもっている。効率的ではない。すべての事柄が実際には党によって決定されており、一党支配が存在する。このように、すべての社会学者は見ている。

自主管理は、一党制のもとでは不可能である。スウェーデンの元首相パルメは重要なイデオログであった。ユーゴの自主管理は形式的なものにすぎない。パルメの考えた自主管理はもっと実践的なものであった。彼は、すべての大使館でさえ、ヒエラルヒー(位階制)なしに、自主管理原則に基づいて運営できる、と考えた。大使館の仕事を館員の間で分担(share)できる、というものである。自分はパルメを尊敬している。また、自分はまた、プラクシス・グループ (Praxis group) を尊敬している。自分は、プラクシス・グループのリーダーのルディ・スペック (クロアチア人) やミハイロ・マルコヴ

イチ（セルビア人）と親しい。自分はミロヴァン・ジラスにもシンパシーを感じており、彼が1996年4月に亡くなったとき、ジラスについて文章を書いた。

労働者は経営を統制(control)できる。だが、彼らには意思決定(decision-making)は無理である。マックス・ウェーバーを尊敬している。彼は、Power (Macht) と、Control Herrschaft)を区別している。自主管理は、Herrschaftの意味では達成できる。ハンガリーでは、医療と年金の分野で2つの組織が創設され、自主管理的にコントロールされている。正しい決定ができる。ハンガリーでは2年前、途方もない腐敗が生じた。誰も管理について知らない。意思決定が互いに交差している。今度発足するオルバン政権は、これら2つの組織を解体することに同意した。右翼政治家オルバンと同様、左翼の自分もこの決定には賛成である。医療と年金の分野は専門家によってコントロールされることになる。2つのやり方でコントロールされる。第1に、議会によって、第2に、専門家によって、コントロールされる。このシステムは民主的に見えるが、本当に民主的なものではない。

社会主義について

ハンガリーは社会主義国になったことはない。非常にスターリン主義的で、軍事的国家であった。ソ連は30年代に間違った道を歩んだ。ソ連はオリエンタル・デスポティズム(Oriental Despotism; 東洋的専制)であった。レーニンは20年代に社会学者を国外に追放した。ソ連社会は軍事的になった。自分は社会主義を信奉していたが、すでにネガティブな側面に気がついていた。ソ連共産党第20回大会で、フルシチョフはスターリン批判を行ったが、たんに個人崇拜を問題にただけで、スターリン主義を分析しなかった。個人崇拜は、その結果にすぎない。当時、ナジ・イムレだけが問題の本質を理解していた。

1919年のハンガリー革命の指導者クーン・ベラとサムエリは恐ろしい人たちであった。彼らは9人の農民を殺した。サムエリは国境で殺された。ハンガリーの歴史は多くの矛盾に満ちている。

カーダールについての評価

当時[56年のスターリン批判以後]、ハンガリーには2つの方向が存在した。民主的な路線を代表していたのがナジ・イムレであった。党は、支配を維持することを欲した。カーダールは56年に刑務所から釈放され、まず、彼は地方の指導者になった。第一書記であったラコシは、ソ連の示唆により、7月にその地位から離れ、その後任としてゲレが第一書記に就任した。ラコシは病気を装い、モスクワのサナトリウムにいた。56年には、モスクワには3つの選択肢があった。第1はナジ・イムレ、第2はゲレ、第3はカーダ

ールであった。カーダールは寛大で、比較的民主的(easy-going and more democratic)であった。56年11月3日、カーダールは権力を掌握した。

[ハンガリー事件に関する私の知識は基本的にはフェイトの著作*に負っていると述べたうえで、ナジの処刑はハンガリー指導部の意思ではなく、モスクワの意思に基づいて行われたのではないかと、私が言ったところ、ヘゲデューシュは次のように述べた。]

ナジの処刑には、カーダールも関与している。秘密警察がルーマニアに行き、ナジを連れ戻した。フランソワ・フェイトは十分な情報をもっていない。58年に、誰が処刑されるべきであり、誰が処刑されるべきでないかの決定が行われた。58年6月16日、彼らは殺された。その決定は、カーダールや第二書記のビスコペールを含む委員会によって下された。58年以降、カーダールはナジの名前に言及しなくなった。うしろめたい気持ちがあるのであろう。カーダールは、どうしても彼について言わなければならないときは、「あの男」(that man)と言った。

「社会主義」時代の積極面

[私は、1945年以降の「社会主義」時代の積極面について、もしあるとしたら、何かと尋ねた。] カーダール時代、強い統制はなかった。人々に自由を許容した。その点では、ラコシ時代よりはました。しかし、秘密警察がたえず車で自分を監視し、尾行していた。自分自身に関する秘密のデータを最近入手した。コピーしてあげてもよい。[ヘゲデューシュは近くの棚から取り出した書類の束を示しながら、このように言った。だが、残念ながら、私はハンガリー語が読めないので、断った。] カーダールの社会主義はスターリン主義的であった。スウェーデンの方が社会主義に近い。

「社会主義」の積極面は、土地改革を実施したことである。2つの地方で自分はこれに関与した。自分は農村の出身である。45年以前、地主が大きな土地を所有していた。貧しい家庭の児童は教育を受けることができなかった。高かった死亡率は「社会主義」時代に低下していった。ジョージ・オーウェルの書物は89年になってようやく買えるようになった。

*あとで、フェイトの著作を読み直すと、次のように記述されている。「1958年にも贖罪の羊としてえらびだされたのはハンガリア人のイムレ・ナジであった。イムレ・ナジの裁判と処刑判決——1956年、カダルは身柄の安全をナジに約束したにもかかわらず——について決定が下されたのは、ブダペストにおいてではなくて(カダルは世論を挑発してもなんらの利益もない)、もっと上の国際的水準、おそらくは5月末モスクワでひらかれたワルシャワ条約機構の会合の席においてであったと信じてよいであろう。中国がとりわけつよくイムレ・ナジ裁判を要求していたのに(それはフルシチョフに新しい難題を

かかえこませるという含みもあった)、裁判がかくも長くひきのばされていたというのもユーゴスラヴィアの心情をそこないたくなかったからであった」(F・フェイト、前掲書、164 - 165頁)。